（別紙２）

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　武 岡　暢

本論文は、風俗産業を主要産業として擁する歓楽街である「新宿歌舞伎町」地域が、どのようにして「都市地域社会」として維持され再生産されているのか、その固有の特質をもつメカニズムを解明すべく、これまでの社会学の理論的蓄積の再検討と、参与観察を含む地域社会のフィールドワークを重ねてまとめあげられた労作である。

序章では、歓楽街として話題にされ凶悪犯罪などとも関連づけられ、しばしば「浄化」作戦の対象となる新宿歌舞伎町をなぜ問題にするのかが論じられる。著者は道徳的な観点からの裁断を退け、さまざまな浄化の動きを受け流しながら歌舞伎町が歓楽街として存続し続けていることを、解くべき謎として設定する。第一章では、社会学の「地域社会」理解の住民中心主義的で、コミュニティ偏重の傾向が批判され、第一に「場」としての空間に着目し、第二にそこに出入りして「移動」する主体を包含し、第三に職業や労働といった「活動」に焦点をあてて解読する方法の可能性が論じられる。そこから風俗産業の経営者、従事者、客の複層的な関係や、「雑居ビル」という空間の特質、民間パトロールが行われると同時に客引きやスカウトの場でもある「ストリート」の動態が、歌舞伎町の固有の特質を捉えるうえで重要であることが指摘される。第二章ではさまざまな統計や調査から歌舞伎町の地域的な特質を引き出しつつ、戦後の地域発展の歴史が描かれる。とりわけ地域社会組織として一定の役割を果たしている歌舞伎町商店街振興組合の活動と、2000 年代以降におけるこの町の変化のきっかけとなった「雑居ビル火災」をとりあげ、歌舞伎町という都市地域社会に関わる複数の主体や、営業実態の複雑さ、行政による査察や実態把握の困難を明確化していく。第三章は、問題を「雑居ビル」という空間にしぼり、警察や東京都の対策から見えてくることや、対応として振興組合が打ち出した地域改善の諸策やホスト協力会の関与などをたどりつつ、地域空間管理の重要な主体として浮かびあがってきた不動産業者の業態と地域社会の構造が分析される。第四章では風俗産業の活動が、そこに関わる経営者や労働者や紹介者の実態から分析されている。自身の参与観察や関係当事者へのヒアリング調査から構成された、風俗産業の組織構造や労働実態の詳細でリアリティのある記述は、この論文の重要な貢献である。第五章はストリートに視点を移し、客引きやスカウトの生態を把握すると同時に、それらを通じて構築されまた修正されていく地域イメージを考察している。そして結論において、ここまでで描きだしてきた諸側面を見わたしつつ、この都市地域社会の動きを含んだ存続のメカニズムを論じている。

本論文は、理論的にさらに深めてもらいたい論点を残すとはいえ、とりわけ調査研究が難しい対象への果敢な取り組みとして貴重である。居住者のコミュニティ研究に偏ってきた都市社会学の伝統を批判し、ビル経営者や不動産業者などの空間の商品化に関わる産業の分析や、風俗産業に関わる流動する主体の分析などを積み重ねて、都市空間分析の新たな方法を模索した社会学の意欲的な研究として高く評価される。本審査委員会は、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。